

人物記念館研究 ～伝える場所～

佐藤桃子

キーワード：人物記念館、場所、記憶、記憶の場、地域

要旨

本研究の目的は、人物記念館における体験について、エスノグラフィーの手法を用いて、訪問者の立場から人物記念館の「場所」構造と、人物記念館の「場所」であるからこそその魅力を明らかにすることである。また、伝記と対比した時の人物記念館での人物体験について、「場所」に根拠を求めることで、「場所」理論に新たな視点を与えることを目指す。

本稿は6章からなる。まず第1章では、本研究の研究設問の目的とその背景について述べる。次に、第2章では先行研究のレビューを行う。米山（2011）と丸田（2008）の「場所」論を紹介し、それと対比した本研究の独自性を示す。また、人物記念館で訪問者は展示を観たり、色々な体験をしたりといった記憶を得ることができるといった観点から、「場所」と、「記憶」や「記憶の場」論との関係を示しつつ、本研究の枠組みを示す。

続く第3章では、「人物記念館」の定義について説明する。「人物記念館」には法的な定義がない。よって、様々な「人物記念館」についての説明を引用し、そこから本研究で取り扱う「人物記念館」の枠組みを説明する。

第4章では、筆者が実施した調査の内容についてまとめる。第5章では、様々な人物記念館での訪問者の体験の実例から、人物記念館における「場所」構造を明らかにし、そこから「場所」理論の新たな視点を考える。そして、「場所」にあるからこそその人物記念館での体験について分析する。

最後の第6章では、分析を基に結論を出す。まず、人物記念館における「場所」構造から、「場所」理論に新たな視点を提案する。そのあと、人物記念館が「場所」であ

るからこそ、伝記を読むことと対比した独自の魅力について述べる。

人物記念館では、訪問者の存在により「場所」の入れ子構造や拡大・発生が生じている。これは、「場所」に係わる人たちにとって、「場所」がそれぞれ異なる意味を持つ可能性があるが故のことである。「場所」を、そこにいる人たちの視点から見ると、それぞれ別の意味を持っていて、「場所」は混ざり合っている。それによって、「場所」は入れ子構造を成したり、拡大して重なり合ったりすることがある。

また、人物記念館は、立体的・具体的な空間性を持つ「場所」であることにより、全身、そして五感を使った体験を訪問者に提供している。これは、伝記を読んで人物を知る体験との、なによりの違いであり、人物記念館独自の魅力だと言える。人物記念館は、伝記とは違った方法を用いて、過去の人物について今を生きる人たちに伝えている。